

物語言説の論理と笑い  
—『うつほ物語』における藤原季英の造形をめぐって—

ギユモ・オリアンヌ

Laughter and the Logic of Narrative Discourse:  
Around the Construction of the Character of Fujiwara no Suefusa in the *The Tale of the Hollow Tree*.

Guillemot Oriane

Abstract

The *Tale of the Hollow Tree* has few scenes where laughter shows an aggressive face as in the episode of the character Fujiwara no Suefusa. This student, who entered Kangaku-in University after the death of his parents, soon becomes the victim of daily mockery because of his poverty. This article aims to reflect on the role that laughter plays in the development of the narrative discourse of *The Tale of the Hollow Tree*. The analysis of the occurrences of laughter in the episode of Fujiwara no Suefusa reveals that laughter is only aggressive. It becomes the expression of a symbolic violence that reinforces the intensity of the abuse and generates suffering. Far from winning the reader's support, laughter can be seen as a strategic tool that leads him to feel compassion for the injustice suffered by the hero. This character who is distinguished by his admirable dedication in studies until being called a "true student" finds himself unable to evolve socially. Laughter then takes on an additional dimension by accompanying a critical discourse that aims to satirically depict the abuses of the institution through the persecutions of the hero. The real targets of laughter in this story, wouldn't it be the laughers?

Key words : Laughter, Narrator, satire, violence, criticism

はじめに

『うつほ物語』全20巻は、日本文学史上現存最古の長編物語であり、成立時期は明確でないが、およそ十世紀末と考えられている。作者も不明であるが、文人・学者であった源順（911～983）とする説が有力である。その『うつほ物語』にははじめの対象となる人物が2人いる。「忠こそ」巻に登場する、継母の一条北の方に虐待される忠こそと、「祭の使」巻で勸学院の学生たちに蔑まれる藤原季英（以下、本文中での呼称により藤英と呼ぶ）である。しかし、両者に対するいじめの表現・描写には大きな違いが見られる。周囲の人々の笑いである。一条北の方は謀略によって忠こそを様々な事件の犯人に仕立てるが、個人的な行動であり、忠こそが嘲笑される場面もない。それに対して、藤英は、勸学院に入学してから、「身を捨てて学問を」（「祭の使」p.226）しているのにも関わらず、同宿する学生たちなどの勸学院の人々に笑われる者となり、蔑まれる毎日を送る。

「物語文学に見える学問—『うつほ物語』と『源氏物語』の検討から—」で、陣野英則は平安時代物語文学における「学問」の描かれ方を分析して、「学問に関与する人々は、これらの物語の中でコミカルな役回りを与え

---

キーワード：笑い、語り手、諷刺、暴力、批判

\*令和4年度生 比較社会文化学専攻

られる傾向がつよい。(省略) 上野の宮のような奇人を利用する学生たち、また「祭の使」巻の藤英も笑いを誘うような調子で語られる。」と指摘して、『源氏物語』と『うつほ物語』ともに「学者と学生、またその関係者を笑いものにするということは、作者と属性を共有する様な人々への揶揄、あるいは作者当人の戯画化ということにさえなりうるだろう」<sup>1</sup>と加える。両作品ともに学者たちが人々からかわれる人物として現れるが、作者が学者を笑いの対象とする理由について考えるべきである。学問をしている人物を揶揄することを目指しているのか、それとも、学問を讃えることを目指しているのか。さらに、藤英は窮迫しているために周囲に蔑まれている人物であるが、いじめの対象となった藤英が、語り手及び読者の笑いをも誘うということになると言えるだろうか。

本稿では、藤英を対象とした笑いは『うつほ物語』の物語言説の論理にどのような役割を果たしているのかについて考察してみたい。笑いに関する語をめぐって笑いが、どのような描かれ方をしているのかについて分析した後、笑いは物語言説におけるどのような位置をもっているのかについて考えたい。

なお、『うつほ物語』の本文引用は、室城秀之『うつほ物語 全』(おうふう、1995年)による。

## 1. 虐待と笑いの論理

藤英は、左大弁で参議にまで上った藤原南蔭を父としながら、父母兄弟を早くに亡くしたことで勸学院の西の曹司に住むことになる。勸学院は、弘仁12年(821)に設立された、藤原氏出身の大学寮学生のための寄宿舎であり、氏の院とも呼ばれた。貞観13年(871)頃に大学別曹すなわち大学附属機関として公認された。藤英は、勸学院の同宿の学生たち、教官、職員たちから蔑まれるという不幸な境遇の人物である。

笑いはうれしさ、おかしさという陽気な感情を表す表現であると同時に、特に集団の笑いが攻撃的に機能するものであり、笑われた相手に苦痛を生じさせる表現である。ホップズやベルグソンを初めとして、古くから哲学者が笑いの暗い顔を明らかにした。『人間論』(1658)でホップズは「他人の弱点あるいは以前の自分自身の弱点に対して、自分の中に不意に優越感を覚えたときに生じる突然の勝利」<sup>2</sup>と笑いを定義する。

吉村研一は『うつほ物語』では「あざけり」の笑いも多く表現されている。嘲笑される対象人物として、三奇人と呼ばれる上野の宮、三春高基、滋野真菅などが登場するが、苦学生である藤原季英(藤英)に周囲から浴びせられる嘲笑は特に執拗である。<sup>3</sup>と指摘しているが、藤英の場合と三奇人の場合を比べると、4人ともに笑いの対象となっているが、笑いの対象とされた者に対する笑いの効果が異なることに気が付く。上野の宮があて宮に手紙を送る際に「あまた度御消息あれど、殿内に笑ひののしりて、御返りなし」(「藤原の君」巻、p.80)と、正頼家の人々に嘲笑されていても、上野の宮が直接笑われることはない。また、三春高基は「京の内にそしり笑ふこと限りなし。それを知らず顔にて交じらひたまふ」(「藤原の君」巻、p.86)と語られる。高基はあざけりの対象人物であるが、その嘲笑を無視している。上野の宮にせよ、三春高基にせよ、笑いの対象となっているものの、笑いの攻撃効果はなく、苦しむ要素でもない。笑いの攻撃効果の激しさが藤英の物語の特徴である。

「祭の使」巻の藤英が対象となる「笑ふ」系統の語の例を拾い出してみると5例を数え得る。この内「笑はる」という受動的表現が一例あるが、多くは能動的表現である。また「笑ひ騒ぎて」、「笑ふ声のす」、「笑ふこと限りなし」等の複合的な表現が見られる。そうした登場人物の笑い方は、声を出さない「笑み」ではなく、大きな声をあげての「笑ひ」がほとんどである。「笑む」の系統の例はないと見られる。日本における笑いの研究の先駆けである柳田国男は「笑ひ」と「笑み」を次のように区別している。「ワラヒには必ず聲があり、エミには少しも聲はない。従つてエミは見るものであり、ワラヒはまた壁一重の隣からでも聴ける」<sup>4</sup>。つまり、藤英が対象となる笑いは、対象に対して聞かせることを目的としている。「笑み」にはない音声を伴う笑いは攻撃性を持つ傾向が強いと言える。

【資料1】かくて、勸学院の西曹司に、身の才もとよりあるうちに、身を捨てて学問をしつつ、はかりなく迫りて、院の内に、すげなく、せうかう・雑色・厨女、言ふことも聞かずかはやいて、まれまれ座に着けば、院の内笑ひ騒ぎて、日に一度、短籍を出だして、一筒の飯を食ふ、院司・鑑取、「藤英がはてへの捻り文」と笑はれ、博士たちに、いささか数まへられず、父・母、筋・族、一度に滅びて、はかりなく便りなき学生、字藤英、さくな季英、歳三十五、かたちこともなく、才かしこく、心かしこき学生なり。

かかる心にも、思ふ心あり。「いかで」と思ふに、ある衆、藤英、かく、はかりなく迫るを見て、「こと

もなき男なりや。右の大將殿も、かばかりの婿は、え取り給はじかし。容面・才はありがたしや」など、これかれうち笑ふを、藤英、紅の涙を流して、「恥づかしく、悲し」と思ひて、「(祭の使) 卷、pp.226-227)

【資料1】は『うつほ物語』における藤英の初登場時の叙述である。笑い系統の語が3例ある。1つ目は、「院の内笑ひ騒ぎて」である。「笑ふ」に「騒ぐ」が後接して「声をあげて笑って大騒ぎする」(日本国語大辞典 第二版)の意となる。笑う者は、対象に聞かせる意図で笑うと言える。語の複合によって、読者には、より強い笑いの攻撃性が感じさせる表現となっている。2つ目は「笑はれ」である。『うつほ物語 全』頭注にある通り「れ」は「受身の助動詞で、主体が転換する」。受け身の表現は、笑いの対象に視線を向け、叙述を、笑う者の観点から笑われる者の観点へ移す。読者を笑いの犠牲者の側に置くことによって、読者の感動を喚起する。受け身表現により、藤英が笑いの被害者であり、笑いによって精神上的損傷を被ることがわかる。3つ目は「これかれうち笑ふ」である。「これかれ」は「多くの物や人をさし示す」(日本国語大辞典 第二版) 代名詞、動詞「うち笑ふ」は「あざけり、おかしさ、よろこびなどの気持で、口をあげて笑い声をたてる。ふと笑う」(同前)の意である。勸学院の全ての人々が、声を立てて藤英をあざ笑っている状況が読み取れる。藤英を嘲笑する「これかれ」として「せうかう・雑色・厨女」、「院司・鎔取」、「博士たち」がいる(「せうかう」の意味は未詳)。同輩の学生たちがいることはもちろんであろう。雑色、厨女たちに笑われる藤英は、下郎の人たちまで含めた勸学院の全ての人々の中で劣位の立場に置かれる。このように最初から藤英は笑いの対象として紹介されているのである。

## 2. 笑いをめぐる作中人物・語り手・読者

【資料1】では「はかりなく迫」と2度繰り返され、揶揄の由来が藤英の貧困であると明らかになる。笑いは、貧困を理由として藤英を侮辱することを目的とした周囲の人々の優越感の表現であり、集団内の加害側が被害側に苦痛を与える言動になる。笑いは虐待の暗い世界では、攻撃的な表現になって、象徴的な暴力となる。寂しい藤英が賑やかな勸学院の人たちと対照的に描かれている。藤英に対する周囲の人々の笑いは、学問に励んでいるのにも関わらず、頼りにする者がなく、出世ができなくなるという不公正さを強調して、読者の同情を呼ぶと言えよう。物語の語り手は、藤英に対する勸学院の人たちの侮蔑的感情を共有せず、学生の才学に焦点を当てる。【資料1】において、語り手は「かたちこともなく、才かしく心かしくき学生なり」と、藤英を紹介する。語り手が学問に励む学生に同情するのに対して、勸学院の人たちは学生の悲嘆を嘲笑する。この矛盾は虐待の不公正さを強化する。この笑いに対して藤英の反応は「紅の涙を流して」とさらに読者の哀れを呼ぶように表現される。読者を主人公とその悲嘆に感動させる役に立つ。

ここで、『竹取物語』<sup>5</sup>の笑う系表現と比較する。

- (a) かぐや姫、暮るるままに思ひわびつる心地、笑ひさかえて、(p.35)
- (b) …と、問はするに、船人、答へていはく、「あやしき言かな」と笑ひて、(p.46)
- (c) これを聞いて、離れたまひし元の上は、腹を切りて笑ひたまふ。(p.49)
- (d) 貝をえ取らずなりにけるよりも、人の聞き笑はむことを日にそへて思ひたまひければ (p.55)

(a) は、庫持皇子が持って来た蓬萊の玉の枝が贖物であると判明した後の、かぐや姫の様子である。笑う人物はかぐや姫、笑われる対象は特に限定されない。読者は、語り手の提示のままに、かぐや姫とともに安堵の笑みを浮かべればよい。(b) は、龍の頸の玉の探索に行かせた家人たちの帰りを待ちきれなくなった大伴大納言が、難波津で船乗り尋ねた場面の記述である。笑う人物は船人、笑われる対象は大納言である。(c) は、自ら龍の頸の玉獲得に乗り出した大納言が、出港後、大海に出るまでもなく嵐に遭い、明石の海岸に漂着後、やっこのことで帰京した顛末を伝え聞いた、大納言の元の妻の様子である。笑う人物は元の妻、笑われる対象は大納言である。(b) (c) とともに、読者は、語り手の提示のままに、大納言の滑稽さを笑えばよい。(d) は、燕の子安貝を採ろうとして転落した後の、石上中納言の状況である。笑う人物は中納言の想念中の世間の人々、笑われる対象は中納言である。中納言が瀕死の状態にあることを聞いたかぐや姫は、中納言に和歌を詠み贈り、中納言は「苦しき心地に、からうじて」(p.56) 返歌を記し、書き終えたところで息絶える。それを聞いたかぐや姫が「すこしあはれ」(p.56) と思ったように、読者は、中納言の脳中の世人に同調するよりは、中納言に対して同情的



になるであろう。(a)~(c)では、笑う人物の感情・語り手の提示の仕方・読者の反応が同一線上に並ぶのに対して、(d)では語り手の言葉の選び方が読者に作用し、笑う人物と読者の反応の間にねじれが生じる。『新全集』の校訂本文に従うと、『竹取』の笑う系語句は、(a)~(d)になるが、『新全集 竹取』の「大納言、御腹みて」(p.43)の「みはらみて」は、諸伝本に「みわらひて」とあり、「見笑ひて」と解せる。家人たちが龍の頸の玉探索に向かうことを承知したのを見て、大納言が満足して笑うことをいう。その場合、笑う人は大納言、笑われる対象は特に限定されない。読者は、笑う大納言をむしろ滑稽に感ずることになるので、笑う人物の感情と読者の反応の間にねじれのある1例となる。

『うつほ物語』の三奇人挿話においては、『竹取』の(a)~(c)同様、笑う人物の感情・語り手の提示の仕方・読者の反応が同一線上に並ぶ(ただし、三奇人を笑う正頼たちをこそ批判的に眺める読者がありえる点で、別種の複雑さがあるが、本稿では立ち入らない)。それに対して、藤英の物語では、語り手の語り方によって、読者は笑う人物ではなく笑われる藤英に共感することになる。藤英の物語を丁寧に描く『うつほ物語』は、『竹取』にわずかに現れた、笑いをめぐる語り手の方法を大きく展開させた。『うつほ』は、笑いをめぐる語り手の方法に関して、『竹取』と重なりながら、より深化させたと言えよう。

### 3. 過剰さと笑い

語り手の語り方が、笑われる藤英への読者の同情を呼び起こす一方で、藤英の惨めな姿があまりにも過度であるために、読者の自ずからの笑いを引き起こすとも言える。「日に一度、短簪を出だして、一箇の飯を食ふ」、「夏は蛸を涼しき袋に多く入れて、書の上に置いて、まどろまず、まいて、日など白くなれば、窓に向かひて、光の見ゆる限り読み、冬は雪をまろがして、そが光に当てて、眼の穿ぐるまで学問を」(「祭の使」巻、p.227)していると、藤英の物質的な悲惨さと学問への献身が過剰に描かれていると言えよう。藤英が、勸学院別当の源正頼邸での試策の会に向かう様子が、次のように語られる。

【資料2】列引き立てる所に、西曹の藤英、常は、ののしり出で立つを見れど、思ひもかけぬを、今日は、えとどまるまじく思ほゆ。穀の衣のわわけ、下襲の半臂もなき、太帷子の上に着て、上の袴・下の袴もなし。冠の、破れひしげて、巾子の限りある、尻切れの尻の破れたる履きて、気もなく青み痩せて、揺ぎ出で来て、「季英、今日の御歩みの列に入らむ」とて、交じり立つ。博士・文人たちより末まで、笑ふこと限りなし。うものすそあらくてけうす。「かの別当殿の殿、上の御殿に劣らず。宿徳、かう、ある限り集ひ立ちて、例の人をだに許し給はぬ世の中に、いはむや、学生の名この衣裳にて参り給はば、氏の院の長き名になりなむ。すみやかにまかりとどまり給へ。いと不便なり。院をも追ひ棄てむ」など言ひて、取り寄りて打ち引かぬばかり、引き退け、押し倒しなどすれど、とどまるべくもあらず。騒ぎ満ちて、歩みやみなむとす。(「祭の使」巻、p.229)

【資料2】には、藤英の姿が、初めて具体的に現れている。藤英は、穀の衣の破れたのに、下襲の半臂もないのを、太帷子の上に着て、上の袴も下の袴もはいていない。冠は破れ損なって、巾子だけが残っている。尻切れ草履のかかとの破れたのを履いている。人物の装束がグロテスクなまでに誇張されていると言える。『新全集』頭注は「正頼邸に向かおうとする藤英は、文人たちが押し止めようとするのも無理がないほど、みすばらしい格好をしている。だが、現実離れした服装と諧謔的な語り口は不快感よりもむしろ面白みを感じさせる」<sup>6</sup>と指摘するが、逆に誇張した滑稽な表現を用いることで、かえってあわれな情趣を表出しているのではないだろうか。

また、笑いは、藤英を集団から除外しながら、藤英が異色の人物であることに焦点をあてる。笑いは、読者の注意を引く方法として認められる。藤英に対する勸学院の人たちの悪感情を共有することなく、語り手は学生の才学に焦点をあてる。【資料1】において、語り手は「かたちこともなく、才かしく、心かしこき学生なり」と、藤英の容姿・才学を讃えていた。他方、勸学院の人々の発言では、「『こともなき男なりや。右の大將殿も、かばかりの婿は、え取り給はじかし。容面・才はありがたしや』など、これかれうち笑ふ」のように、才学の高さが、あざけりの中に取り込まれていた。

語り手による学生への同情は、作者が藤英に近い社会階層に属している文人であることを想起させる。『うつほ物語』において、音楽伝承と並んで、学問が中心的な要素となっている。物語の冒頭から、語り手が俊蔭の学

才に焦点をあてる。

【資料3】父が高麗人に会ふに、この七歳なる子（省略）高麗人と書を作り交はしければ、朝廷、聞こし召して、「あやしうめづらしきことなり（省略）」と思すほどに、十二歳にて冠しつ。帝（省略）唐土に三度渡れる博士（省略）を召して、難き題を出ださせて試みさせ給ふ。（省略）学生の男ども、才ある男ども、手惑ひをして、一行の書も奉らぬに、俊蔭は、吏部の書を、いとになく作り出だして奉れる時に、一天下、人皆言ひあさみて、その度、俊蔭一人進士になりぬ。（「俊蔭」巻、p.9）

語り手は、俊蔭の学才を称える。【資料3】によれば、俊蔭は7歳で高麗人と漢詩を作り交わし、12歳で元服し、特別な試験で進士（文章生）となった。その後の物語叙述によれば、翌年に秀才の試験に合格し、式部丞に任じられたとある。こうした記述と読み合わせるならば、藤英の物語では、学問が笑いの対象ではないことが明らかになる。藤英を笑う人たちに対して、読者が批判的になるように、仕向けているのが語り手の戦略である。

#### 4. 物語言説の論理と笑い

古くから、藤英を作者の自画像として取り上げる研究があふれている。中村忠行は「藤英のモデル—『宇津保物語』の素材研究—」で『宇津保物語』に登場する異色ある人物中で、作者から同情的な眼を以て眺められ、或いは、作者自身の姿を反映してゐるのではないかと見られる者に、藤英—藤原季英がある。<sup>7</sup>と述べている。また、「親兄弟と早く死別し、長く苦学した境遇が順のそれと重なることもあるが、社会の不正を告発する発言やその栄達に文人たちの現実批判の意志、果たせぬ夢を託されていると見られてきたのである」<sup>8</sup>と江戸英雄はいう。窮迫しているにも関わらず、自分の才学で出世できた藤英の上昇は当代の文人にとって理想的な道であるだろう。藤英の物語では忠遠の言説をはじめとして、ところどころに勸学院の制度に対する批判が込められている。藤英のぼろぼろの格好を見て、人々が大笑いをした場面の次に、曹頭進士藤原忠遠が「まことの大学の衆」を以下のように定義する。

【資料4】「などか、藤英の、別当殿に参り給ふらむからに、歩みのやまむ。藤英は、氏の院の学生にはあらずや。衣裳右てなることは、いはゆる大学の衆なり。冠暈なはり、椽の衣破れ崩れ、下沓破れて、憔悴したる人の、身の才あるをなむ、学生と言ふ。これ、さこそ出で立ちもすれ。親ある人の、身の才もなく、高家を頼み、財を尽くして、下に潜りをしつはなやぐ人は、学生にはあらず。なぞの文屋童か、物わづらひはする。はや、出で立ち給はむ」などで、「藤英、立ち給へ。これなむ、まことの大学の衆」とて。（「祭の使」巻、pp.229-230）

忠遠は、学才はないのに、権勢家の後ろ盾の力を借り、賄賂工作によって羽振りよくしている人物を批判し、みすばらしい姿で苦学する人物こそが真の学生であると、藤英を弁護する。ここでの忠遠の発言内容が興味ぶかい。これまで勸学院の人たちから欠点として扱われていたまさにそのことが、真の学生の美德となる。

高橋亨は次のように指摘する。「文人の立場からの、現実社会に対する批判がはっきりと読み取れる。三奇人にみられた貴族の価値観への批判ほど徹底していないというにせよ、笑いの内に逆転してしまうのではない、現実をふまえた発言である」<sup>9</sup>、「勸学院は藤原氏の私学であり、本来は律令体制下の官僚養成機関である。そのほんものの学生が上昇しうる可能性を、物語は現実化しようとしている。そのためには正頼が源氏であるにもかかわらず、勸学院の理念を知っている左大将として描かれねばならなかった。忠遠という援助者と、正頼という守護者とを得て、はじめて藤英の栄達は現実へと向かうことになったのである」<sup>10</sup>。

勸学院は藤原氏出身の大学寮学生に学問を奨励するはずの施設であったが、『うつほ物語』では勸学院は不正と不平等が支配する施設として現れる。笑いは、その不正と不平等を暴き出す端的な表現になる。勸学院への批判的な言説が藤英の物語では中心的な位置を占めている。忠遠の発言によって、藤英は試策の詩宴への参加が許されたが、講師役の式部丞はわざと藤英の詩を読み上げない。理由は藤英の才能を「上達部見給はむに名高くなりぬべければ」（「祭の使」巻、p.230）である。つまり、上達部の目にとまったりすれば、有名になるに違いないので、藤英の詩をとり隠して読まずしまいになってしまった。これまで、勸学院の人たちが藤英の貧乏に対して優越感を感じ、藤英を蔑んでいたが、式部丞が勸学院出身であるか否かはさて置き、ここでは人々が藤英の才能を恐れている。藤英の物語において、初めて力の均衡の逆転へ向かっている。藤英は自作の詩を自ら読む

ことにした。藤英はいじめの犠牲者であるが、彼はいじめに対して諦める忠こそと異なり、諦めず、積極的に行動している。自作を読む藤英の声は「高麗鈴を振り立つるに劣らず」（「祭の使」巻、p.230）と語られ、正頼が耳にとめる。しかし、藤英が近づくと、「昼よりも明かく照り満ちたる火影に見えたる姿、限りなくめづらし。え念ぜず一度にさと笑ふ声のす。荒く警策して鳴り静まりぬ」（「祭の使」巻、p.231）と、それまで暗さに隠れていた藤英が現れ、藤英のぼろぼろの格好が聴衆の大笑いを起こす。この笑いは『うつほ物語』における藤英を対象とした最後の笑いである。さらに、藤英は自分の身の上を語る際に、「紅の涙を流して申す」（「祭の使」巻、p.231）。笑いの表現が涙の表現に変わっていくことが見られる。藤英をからかおうと思っていた人々が、藤英の悲嘆に心を動かされる。

さらに、藤英を弁護する忠遠の言説に続く。

【資料5】曹頭進士、「ただ今、氏の院に、魂定まり、身の才すぐれたる者、これのみなむ侍る。人のために、犯し・過ち、一期一生なし。身の便りなきを怠りとして、かう、ただ、院内すげなくして、私豊かに、悟りなき学生どもには、豊かに賜へれども、季英が、便りを失ひ、学問に疲るるをば、一度の職行ふ恐れて、つかれふすることなし。跡を絶ちて籠り侍る学生なり」と申す。（「祭の使」巻、p.232）

頼りどころなく学問に疲れるほどに勉強しているが、勸学院内の人たちに冷淡に扱われている藤英の状況が語られる。これを聞いた正頼は感嘆して、藤英の援助者となる。藤英の物語において、笑いは、藤英の上昇の契機となる。正頼邸へ向かう時も、正頼の前に出る時も、笑いは、藤英を弁護する忠遠を導いた。忠遠の援助により、藤英は正頼邸に行くことができ、その場で才能が認められ、出世の道が開かれた。笑いは再生の契機である。

正頼が藤英に、民部丞元則の立派な装束を着けさせた際に、「装束・かたち、笑ひつるすうはうに、こよなくまさりたり。作り出だせる詩、そこばくの中にすぐれたり。衆の中に、ただ尤一なり」（「祭の使」巻、p.233）と、語り手は、藤英の姿を嘲笑した学生たちに格段と勝ると語る。藤英が作り出した詩も、多くの人のなかでも秀逸であった。大学の衆のなかでは、ただ今もっとも優れている人物であるという。語り手の褒め言葉が勸学院の人々と藤英を比較し、秀逸で優れている人物として描写し、勸学院の他の学生たちよりも優れた人物として藤英を確立している。ここに至って、笑いはもはや藤英を侮辱することを目的としてはいない。それどころか、明暗を際立たせ、他の学生に対する彼の優位を浮き彫りにしている。この最後の笑いが、かつて虐めた勸学院の人たちに対する藤英の勝利を象徴している。

## 5. 批判としての笑い

『うつほ物語』において、藤英に対するあざけりの笑いは、勸学院の不公正さの表現であった。再生の契機であり、最終的には勝利の象徴となった。幼い頃から窮迫していた藤英は、次々に右大弁、右近少将、式部少輔、文章博士、春宮学士を兼ねた上、内裏、春宮、院の殿上を許され、「国譲・下」巻では三位、参議、右大将、按察使、式部大輔となり、光栄に向かった<sup>11</sup>。このように、藤原季英の物語は、学問による学生の上昇譚として読み取れる。先に見たように、藤英の虐待にまつわる笑いは、勸学院に対する批判の方法になる。藤英に対する嘲笑によって、藤英は忠遠という援助者と、正頼という守護者を得て、「まことの学生」と見なされる。従って、藤英の物語では、笑いが当時の大学寮・勸学院の閉塞状況への批判を目的とした作者の戦略であると言えよう。笑いは勸学院への批判の言葉を言うきっかけにもなった。忠遠の「まことの学生」という言説も現れ、不公正と不平等な虐待にも中心的に関与する。

江戸英雄が指摘するように<sup>12</sup>、【資料4】の「親ある人の…」、【資料5】の「私豊かに…」は、三善清行が延喜14年（914）に著した「意見十二箇条」<sup>13</sup>の第4条「請ふらくは、大学の生徒の食料を加へ給はらむことを」の「ここに博士等、貢擧の時に至るごとに、ただ歴名をもて士を薦む。曾て才の高下、人の劳逸を問はず。請託これによりて問々起り、濫吹これがために繁く生る。権門の余唾に潤ふ者は羽翼を生して青雲に入り、闕里の遺蹤を踏む者は、子衿を詠じて鬻舎を辞す」と、学生の才能や努力の程度ではなく、後見人の財力に応じて、任官等がなされる事態を嘆く点で共通する。10世紀半ばから後半に書かれたと考えられる『本朝文粹』巻第12所収の2篇の落書「桜嶋忠信落書」「秋夜書懐呈諸文友兼南隣源処士」も、大学寮の腐敗と売官の弊風を批判する<sup>14</sup>。

藤英をめぐる笑いの方法が、文学史上どのように引き継がれるか、『源氏物語』少女巻を瞥見する。『源氏物語』<sup>15</sup>



少女巻の前半に、光源氏の子息夕霧の元服および字をつける儀式、寮試の予行と寮試の様子が語られる。元服後、大宮に語る夕霧の教育方針の中で、光源氏は、良家の子弟は大学で学ぶことなく官位官職の昇進を思い通りにできるが、時勢が変われば威勢を失い、世間に軽侮されることになるのだから、夕霧には、大学で学ぶ漢学によって、国政の重鎮となる心構えを身につけさせたいという。光源氏の発言は、藤英の物語における大学寮・勸学院批判を、貴族社会全体に拡大している。他方で、光源氏は「かくてはぐくみはべらば、せまりたる大学の衆とて、笑ひ侮る人もよもはべらじと思ふたまふる」（少女③pp.22-23）とも言う。自分が養育するのだから、夕霧が「せまりたる大学の衆」と笑われはしないと言うのであるから、言い換えれば、大学寮の関係者が笑われること自体は否定しないのである。

夕霧に字をつける儀式の宴会での様子が、次のように語られる。

【資料6】家より外にもとめたる装束どもの、うちあはずかたくなしき姿などをも恥なく、面もち、声づかひ、むべむべしくもてなしつつ、座につき並びたる作法よりはじめ、見も知らぬさまどもなり。若き君達は、えたへずほほ笑まれぬ。さるはもの笑ひなどすまじく、過ぐしつつ、しづまれるかぎりをと選り出だして、瓶子なども取らせたまへるに、筋異なりけるまじらひにて、右大将、民部卿などの、おほなおほな土器とりたまへるを、あさましく咎め出でつつおろす。(博士)「おほし垣下あるじ、はなはだ非常にはべりたうぶ。かくばかりのしるしとあるながしを知らずしてや朝廷には仕うまつりたうぶ。はなはだをこなり」など言ふに、人々みなほころびて笑ひぬれば、また、(博士)「鳴り高し。鳴りやまむ。はなはだ非常なり。座を退きて立ちたうびなん」など、おどし言ふもいとをかし。(少女③pp.24-25)

博士などの大学関係者は、借り物の衣装が身に合わず不格好であり、着座の仕方も異様であって、若い貴公子たちからは思わず笑みが漏れる。博士たちの接待役には重々しい人物が当たったが、その右大将、民部卿などを、博士が叱りつけるに及んで、こらえきれず一座は笑いに包まれる。ここでは、笑う人＝貴族たち・語り手の提示の仕方・読者の認識が同一線上に並ぶと言える。少女巻では、笑いと学問・学生をめぐる物語の手法が、平板な語り方に回帰し、嘲笑される学者の価値転倒は起きていない。ただし、「見ならひたまはぬ人々は、めづらしく興ありと思ひ、この道より出で立ちたまへる上達部などは、したり顔にうちほほ笑みなどしつつ」（少女③p.25）ともあり、『うつほ』の藤英に対してあったような、笑いの攻撃性は弱い。

夕霧が寮試の予行でめざましい成果を上げた後に、夕霧の個人教授を担当した大内記について、「大将、盃さしたまへば、いたう酔ひ痴れてをる顔つき、いと瘦せ瘦せなり。世のひがものにて、才のほどよりは用ゐられず、すげなくて身貧しくなむありけるを、御覧じうるところありて、かくとりわき召し寄せたるなりけり」（少女③p.29）と語られる。貧困にあえぐ学者肌の人材を、光源氏が引き立てたのである。さらに、夕霧の寮試の後には、「昔おほえて大学の榮ゆるころ」（少女③p.30）と語られる。学者たちの「猿樂がまし」（少女③p.25）さを含め、大学全体を引き上げるのが『源氏物語』であった。「字つけの儀式の儒者たちの言動や（省略）大内記の面影は、『宇津保物語』祭使巻の藤英が源泉か」<sup>16</sup>と指摘されるように、『源氏』が、『うつほ』の藤英の物語をふまえていることは明らかであるが、『源氏』は単なる模倣に終わることを避け、異なる描き方をした。逆に言えば、笑いの攻撃性を活用した劇的な価値転倒は、藤英の物語に特徴的な事柄であると言える。

## 終わりに

本稿では、『うつほ物語』の藤英の物語において、藤英に対する笑いが、いじめに関与する暴力的な行動であることを明らかにした。その笑いは、貧困に苦しむ藤英を勸学院から排除することのみを目的とした笑いであり、虐待に対する読者の同情を誘う。虐待の主要素である笑いは、残酷な表現になっている。しかし、藤英の物語の当初、破壊の機能を担っていた笑いは、正頼邸の場面では藤英の能力を認めることを導いて、藤英は榮達へ向かうことになり、人物再生のベクトルとなったと言える。

言説の面では藤英の物語も藤原氏の勸学院制度に対する風刺的な物語として読めるだろう。藤英の物語では、藤英を笑う者こそが、笑いの本当の対象ではないだろうか。藤英に対する笑いは不公正の制度を反映しながら藤原氏の勸学院制度の没落を表現する方法になる。同じように『源氏物語』では博士の滑稽な表出によって、学問が軽視されている状況を批判することを目指している。笑いを通じた社会制度批判・腐敗の告発の文学的手法が、

『うつほ』から『源氏』へと引き継がれていると言えよう。

### 【参考文献一覧】

1. 陣野英則「物語文学にみえる学問—『うつほ物語』と『源氏物語』の検討から—」『専修大学人文科学研究所月報』第272号、2014年9月、p.26
2. “I may therefore conclude, that the passion of Laughter is nothing else but sudden Glory arising from a sudden conception of some Eminency in ourselves, by comparison with the Infirmity of others, or with our own formerly” (Hobbes Thomas, The treatise on Human Nature. And that on Liberty and Necessity, JJohnson and Company, 1812年, p.65).
3. 学習院大学平安文学研究会『うつほ物語大事典』勉誠出版、2013年、p.835
4. 柳田国男『定本柳田国男集』第七巻、筑摩書房、1968年、p.231
5. 『竹取物語』の引用は、『新編日本古典文学全集12』（小学館、1994年）による。『竹取物語』の校注・訳者は片桐洋一。以下、『新編日本古典文学全集』を『新全集』と略称する。
6. 中野幸一校注・訳『新編日本古典文学全集14 うつほ物語①』小学館、1999年、p.492
7. 中村忠行「藤英のモデル—『うつほ物語』の素材研究の一—」『天理大学学報』第12巻第1号、1960年6月、p.15
8. 江戸英雄「『うつほ物語』における物語の〈領域〉—藤原季英の造型をめぐって—」物語研究会編『物語研究』第1号、2001年、p.33
9. 高橋亨「祭りの幻想と宇津保物語」『物語文芸の表現史』名古屋大学出版会、1987年、p.158
10. 同前、p.159
11. 藤英の昇進過程については、松野彩「『うつほ物語』の官職—氏族別の公卿の輩出状況—」（『うつほ物語と平安貴族生活—史実と虚構の織りなす世界』新典社、2015年、p.23）を参照されたい。
12. 注8. 前掲、p.34
13. 「意見十二箇条」の引用は、所功編著『三善清行の遺文集』（方丈堂出版、2018年、pp.75-77）の訓読文による。
14. 後藤昭雄「桜島忠信落書について」九州大学国語国文学会『語文研究』第23号、1967年2月、pp.34-37
15. 『源氏物語』の引用は、阿部秋生ほか校注・訳『新編日本古典文学全集22 源氏物語③』（小学館、1996年）による。
16. 注15. 前掲書、p.29